

Significance of e-Learning with Teaching English :
English Education Consideration to Classroom
Practice for Japanese Learners and Teachers of
English

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1360

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



英語教育における e ラーニングの意義

— 日本人英語学習者・指導者のための授業実践による英語教育学的考察 —

Significance of e-Learning with Teaching English

English Education Consideration to Classroom Practice for Japanese Learners and Teachers of English

大 山 健 一

OHYAMA, Kenichi

This paper proposes how e-learning is significant in terms of English education. The e-learning has already functioned as one of the educational fields. Through such an ICT education, however, Japanese learners of English have not necessarily got enough chances to acquire English skills. This is mostly because they learn English using PC without effective methods. Although teachers should learn knowledge of this field, the methods have been being internationalized in the current society. The possible methods can be based on English education related to grammar, listening, and reading. The skills for understanding English are essential to the first step to leaning English; moreover, such comprehensive skills are relative to communicative ones: speaking and writing. The consideration can be a sort of references to e-learning for learners and teachers attempted by the present paper.

1. 目的

本論文は、英語教育において如何にして「e ラーニング」(e-Learning)が必要であるのかを提唱している。この「e ラーニング」は、英語教育の1つの分野として既に機能している。しかしながら、ICT教育の一環としても、日本人英語学習者には必ずしも習得するのに十分な機会が得られているとは限らない。その理由の1つに挙げられるのは、効果的な手法がない状態で、コンピュータを使って英語

を学んでいるためである。指導側がe ラーニングの分野に関する知識を学ぶ必要はあるが、現代社会ではこの手法は国際化(Internationalization)されつつある。可能な方法としては、文法、リスニング、リーディングに関連した英語教育を基にしたものである。これらの技能は英語を理解するためのものであり、英語学習への第一歩として必要不可欠である。更に、この理解する技能はスピーキングとライティングの表現する技能に関連している。よって、「e ラーニング」を基に、

キーワード：教育改善研究、e ラーニング、カリキュラム開発、リメディアル教育、英語教育学
Keywords : study of education improvement, e-Learning, curriculum development, remedial education, English education

日本人が英語を学ぶ際にも教える際にも注目しなくてはならない点は何であるのかを提唱する。

2. 授業実践

2020年度春期（前期）科目「英語（読む英

語）」が対象科目となる。この科目は、全学共通科目で、2年生以上が履修できる選択科目である。履修学生は8名である。

シラバスは表2-1となる。「読む英語」という解釈から「聞く英語」という解釈に拡大し、それらの基本となる「英文法」も学習

表2-1 「英語（読む英語）」シラバス

授業概要

英語を「読む」ことと併せて関連する「聞く」ことから英語を「理解する」ことを基に、自分自身の英語力、特に英語コンプリヘンション能力（リーディング技能とリスニング技能）がどの程度なのかを把握し、目標を立て、将来的な英語学習の手掛かりを得られるように講義・指導する。主要な事項の確認・復習として、英語の文法・リスニング・リーディングについて講義する。その上で、eラーニングを活用することで、様々なトピックを題材にした授業内活動を指導する。更に、TOEICなどの英語資格試験対策への理解も指導する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 英語学習・資格試験対策
- 第3回 文法事項確認・復習とeラーニング練習（1）：品詞と綴り字
- 第4回 文法事項確認・復習とeラーニング練習（2）：単語と句
- 第5回 文法事項確認・復習とeラーニング練習（3）：文の構造・意味
- 第6回 文法事項確認・復習とeラーニング練習（4）：文法の基本形・応用形
- 第7回 リスニング事項確認・復習とeラーニング練習（1）：短文・質問文のリスニング
- 第8回 リスニング事項確認・復習とeラーニング練習（2）：複数話者間のリスニング
- 第9回 リスニング事項確認・復習とeラーニング練習（3）：イラストのリスニング
- 第10回 リスニング事項確認・復習とeラーニング練習（4）：説明文のリスニング
- 第11回 リーディング事項確認・復習とeラーニング練習（1）：短文・複文のリーディング
- 第12回 リーディング事項確認・復習とeラーニング練習（2）：eメールのリーディング
- 第13回 リーディング事項確認・復習とeラーニング練習（3）：広告のリーディング
- 第14回 リーディング事項確認・復習とeラーニング練習（4）：長文のリーディング
- 第15回 まとめ：文法・リスニング・リーディングの総合練習

到達目標

- ① eラーニングを通して、土台となる英文法と英語リーディング・リスニング技能向上について理解することができる。
- ② 基礎的な語彙や語法を確認しながら、重要な要素となる文法の理解を基に、日本語らしい英文ではなく、英語らしい英文を理解することができる。

履修上の注意

履修制限を設ける場合があるため、初回には出席することが望ましい（状況に応じて初回以外でも個別対応します）。

eラーニングのライセンス契約が必要なため、授業内において手続きを説明します。

予習・復習

- ① 予習では、何が理解できないのか、何処まで理解できているのかを把握した上で授業に望む。
- ② 復習では、理解した上で具体例が挙げられるようにする。

評価方法

eラーニング達成度（50%）、課題（20%）、授業態度（30%）

テキスト

『総合英語コース7』、リアリーニングリッシュ

※ライセンス契約（2,800円（税抜））

対象としている。基本的には、2つのパートから成り立っており、1つは講義形式、もう1つは演習形式である。前者の講義形式では、文法・リスニング・リーディングの3つの分野における重要な事項を提示し、覚えているか、忘れてしまっていないか、などの視点から、復習と確認の場を設けている。この重要事項というものは、学習者にとって一定ではなく、様々であるため、事前に学生からどのような事項を復習・確認として授業で取り上げてもらいたいのかを調査している。

表2-2が今回の対象とした事項となる。様々な事項が対象となっており、各分野において例文を挙げながら具体的に説明している。このように2年生以上の学生がどのような事項を復習・確認したいのかを認識しておくことで、今までの英語学習（特に前段階の1年生）でどのような項目に学習困難が生じてきたのかということ把握することも可能である。

後者の演習形式では、「e ラーニング」を導入している。講義形式での復習・確認から実際の問題をPCを使って実践的に練習する形である。この「e ラーニング」には、『総合英語コース7』（リアリーニングリッシュ, 2017）を教材としている。この教材では、文法・リスニング・リーディングの分野にそれぞれ特化した問題の構成となっている。全50レッス

ンから成り立っており、各分野では練習問題を解き、最後の確認テストに合格すると1レッスンが達成する流れである。レッスンを実施するにあたり、事前に診断テストが設けられており、3つの分野における英語力を診断し、学生の英語力に適切な内容で受講することが可能である。授業後半の時間帯で達成できなかったレッスンでは、次回までの課題として受講するように指導している。授業時間外も含めて、2レッスンまたは3レッスンを受講することで無理なく達成できると考えられる。

3. 教育的手法とカリキュラム開発

「e ラーニング」に関しては、大山（2014）では、日本人学習者が「e ラーニング」を通してどのような学習要因があるのかを探ることが目的である。具体的には、大学の授業において市販の「e ラーニング」教材を使用し、その有効性を調べている。事前・事後の判断基準にはTOEIC-IPのスコアを基に、事後のスコアが上がった要因を「第二言語・外国語習得論」（Second and Foreign Language Acquisition）から検証し、その結果から「音声表記」と「文字表記」の必要性を提示している。「e ラーニング」の分野において「第二言語・外国語習得論」という理論的な枠組みで検討し、可能な指導プロセスを提案して

表2-2 履修学生が復習・確認を希望した重要事項

<p><u>文法事項</u> 自動詞と他動詞、品詞と文構造、文語体と口語体、関係代名詞と関係副詞の見分け方、助動詞の使い分け、haveの動詞用法と助動詞用法、仮定法、副詞の位置</p> <p><u>リスニング事項</u> 脱落、連結、同音異義語と同形異義語、接続、精聴と速聴、リピーティングとシャドーイング</p> <p><u>リーディング事項</u> 精読と速読、代名詞の理解、速読と飛ばし読み、未知語と飛ばし読み、スラッシュ読み</p>
--

いる。

リメディアル教育やリベラル・アーツの一環として、大山（2020）における英語コミュニケーション学習の枠組みを導入している。特に、英語4技能（リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング）と英語2能力（リーディング・リスニングの「コンプリヘンション能力」とライティング・スピーキングの「コミュニケーション能力」）を基に、「新たなる英語2能力」（「音声を理解・表現する能力：音声能力」と「文字を理解・表現する能力：文字能力」）を提唱している。

以上を踏まえ、英語教育学的な「自然性」（Naturalness）の視点から、Implicational Hierarchy (IH) (Jakobson, 1941) と「有標性」（Markedness）(Eckman, 1977) を基にするのが妥当である。前者は容易なものから困難なものへと習得する学習プロセスであり、後者は言語普遍的特徴を示す「無標」（Unmarkedness）から言語固有の特徴を示す「有標」へと習得する学習プロセスである。加えて、Feature Hypothesis (FH) (McAllister et al., 2002) で示されている言語習得の内容に関わる素性も存在している。リメディアル教育やリベラル・アーツも意識し、これらを基にしたカリキュラム開発の試案は表3の手順と考えられる。

理解を基にする授業においても、表現を基

にする授業においても、「技能から能力へ」と「理解から表現へ」の一連の学習プロセスを常に重要視しなくてはならない。その上で、どの段階での授業内容になるのかとマクロ的な視点からミクロ的な視点へ移行するのが肝要であると考えられる。表3の①から③までから④への移行は、演繹的な方向性のため、アクティブ・ラーニングのような帰納的な方向性ではない。しかしながら、④において、学生各自の英語力に応じた「eラーニング」を通して学習への積極性が生じることに繋がっている。「eラーニング」の実施中に学生各自が①から③までへと遡ることで、表2-2の学生が希望した重要事項を復習・確認できることから学習への動機付けが生じることにも繋がっている。換言すれば、重要事項の復習・確認から「eラーニング」の提供・実施への流れは、一見すると演繹的な指導ではあるが、学生からは内在化された帰納的な指導でもあることが垣間見られる。この「内在化されたアクティブ・ラーニング」（Internalized Active Learning）が「eラーニング」の必要性と結び付いていると言っても過言ではないと思われる。

4. 結論

英語教育において如何にして「eラーニング」が必要であるのかを提唱してきた。授業

表3 eラーニングを基にしたカリキュラム開発の試案

①英語力（文法と英語4技能）の復習と確認 ※学生各自の英語力を測定しない ↓ ②英語4技能から英語2能力への転換指導 ↓ ③英語2能力から「新たなる英語2能力」における「音声能力」と「文字能力」の大別指導 ※リスニング指導やリーディング指導などと1つの分野に断定しない ↓ ④学生各自の英語力に応じたeラーニングの提供と実施
--

実践から教育的手法と、リメディアル教育も意識したカリキュラム開発を論じ、「内在化されたアクティブ・ラーニング」を定義した。授業に「eラーニング」の活動として組み込む事は、非常に大きい教育的効果を生み出す可能性があり、これが「eラーニング」のメリットになり得る。特に、学習者の個性（英語力、学習動機、学習進度など）に1つひとつ対応できるという点が高い評価に繋がると考えられる。

今後の改善点としては、学生の英語力の違いによる分析の仕方、「eラーニング」で達成に困難であった事項と容易であった事項の比較、事後アンケート調査、などより詳細な分析（統計分析を含む）が必要である。また、履修者人数が少なかったこともあったため、今後の継続的な研究も必要である。今回対象とした2020年度春期（前期）では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染防止対策の一環として、授業時数15回中6回が遠隔（オンライン）授業での実施となり、授業開始の遅延により、夏季休暇明けまで授業期間となった。このことから、例年の春期（前期）科目の授業期間とは異なるため、特異性が生じていたことは考慮せざるを得ない。

今後の「eラーニング」での活性化を目指すためにはIH、「有標性」、FHを考慮しつつ、多角的な検討をし、共存してゆく必要がある。本研究の方法が今後の英語教育への寄与に貢献できると考えられる。

参考文献

- Eckman, F. R. (1977). Markedness and the contrastive analysis hypothesis. *Language Learning*, 27, (2), 315-330.

- Jakobson, R. (1941). *Child Language Aphasia and Phonological Universals*. The Hague: Mouton.
- McAllister, R., Flege, J. E., & Piske, T. (2002). The influence of L1 on the acquisition of Swedish quantity by native speakers of Spanish, English and Estonian. *Journal of Phonetics*, 30, 229-258.
- 大山健一. (2014). eラーニングの学習要因と教育的手法. 東京電機大学『総合文化研究』, 12, 123-128.
- 大山健一. (2020). 「国際化」を目指した英語コミュニケーションの意義. 『江戸川大学紀要』, 30, 487-493.
- リアリーイングリッシュ. (2017). 『総合英語コース7』. 東京: リアリーイングリッシュ.